

エ キ

力作投入の嵐で重たい・・・

よって2分割にてお届けします。

惜しい作品/全作品講評と順位/受賞発表は
「補足資料」にてお楽しみください。

流行病に罹りて、地方へ療養に向かう道中、列車の中にて詠める

せきこみし

われ乗る車窓に

雪落ちて

打ち震えつ

ながれゆくえき

僕の途中駅 君の最寄り駅

三両目の中央のドア

君は毎朝この時間にこの場所から 僕のいるこの電車に乗って来たね
初めて君を見かけたその日から ここは僕のお決まりの場所になったんだ

君は夢中で本を読んでいたね 僕の視線なんて気にも留めずに

いつも決まってそれは江国香織 『こうばしい日々』がお気に入り
試しにそれを買ってみたけれど なんだか恥ずかしくて 机の奥にしまったんだ

一度だけ言葉を交わしたね 君が落とした手帳を 僕が拾って渡したときに

「あの、落としましたよ。」 「あつ、ありがとうございます。」

たった一言だったけど 体中が心臓になったみたいに すぐドキドキしたんだ

あれから2年が経って 僕はサラリーマンになった

それでもここはまだ 僕のお決まりの場所なんだ

もうこの時間に乗る必要はないけれど……

……この駅で君が乗って来るのを期待してるわけじゃないけれど……

この駅は僕には他と違って見えるんだ

僕の途中駅 君の最寄り駅

なんだか 淡く白いやさしい光に包まれている気がするんだ
いつかこの駅に一度降りてみよう

駅鈴をさずける者達

暗く狭い回廊を通ると、少し開けた空間に出た。其処にはマスクをした大人達が数人、診察台とその上の大きな皿、そして更にその上に包帯に包まれたモノが一つ。

大人達は手分けして真新しい包帯に包まれたそれを露にした。

中は、人間だったモノだった。



とうとう来てしまった齢十五。

僕はミイラ技師の子供だから役務を果たさねばならない。今回はその研修だ。なぜなら、ミイラを作るのだって経験がいる。カノポスの壺に納める内臓も種類が違うし、ナトロンのすりこみ方にも細心の注意が必要だし、その他色々と熟練の技術がある。

この国でミイラ技師はエリートコースだから、生活に心配は無い。だから、今だけは我慢しよう：そうは思っていたがやはりこのグロテスクさは何物にも代え難い。大人達がエチオピア石でモノの脇腹をゾリゾリと切り開いていくのを見て、思わず脇腹が熱くなるような錯覚に囚われて脇腹をグツと抑えてしまった。

内臓がカノポスの壺に納められ、出来た空洞には吸水性のある草が詰められた。次に大人達のうちの一人が金属で出来た鉤のようなものを取り出し、おもむろに鼻腔に差し込んだ。そして、慎重且つ大胆に鉤を打ち込んでいく。

ガッン、ガッン……バギツ

空洞内に響き渡る破砕音。脳髓のたつぷり詰まった頭蓋の底を叩き割ると鉤を奥深く入れてぐちゃぐちゃとかきまわす。鉤を抜く。鼻腔からとろとろ、とろとろと出てくる茶と朱のマーブル状の液体。

僕の意識はそこで途絶えた。

(溶暗)

ゆつくりと目を開けぼんやり視界が鮮明になると、こちらを至近距離からじつと見つめるジャッカルの眼が二つ。

現世と冥界の間の案内人であるアヌビスはゆつくりと口を開いた。

「君は死んだ。私と一緒に来なさい。」

アヌビスに導かれるまま、ぴかぴかに磨き上げられた青色御影石の回廊を進む。やがて、光が見えてきた。通路の終わりだ。暗い光が僕を包むとそこが法廷であることに気づいた。

四十二人の裁判官からあれやこれや訊かれたが、素直に答えるとすぐに奥に通してもらえた。奥にあつたのは大きな天秤。そして、右には知恵の神トト、左には異形の怪物アメミット、中央には冥界の長にして裁判長のオシリス。

トトが見守る中、天秤にマアトの羽根が乗せられる。隣にいたアヌビスがそつと僕の胸に手をかざした。手はずぶずぶと僕の中に入り赤く染まった心臓を取り出した。痛みは無かった。アヌビスが取り出した心臓を天秤に乗せると、天秤が動き出した。

しばらくして、トトがオシリスに一言二言耳打ちし、オシリスは満足したように首肯した。「判決を言い渡す。そなたには現世に還ってもらう。若くして死んだそなたには冥界の永遠の命など意味が無いであろう。」



「おい、大丈夫が、しっかりしろ！」

僕は大きな声にびっくりして目を覚ました。

「いきなり倒れたからびっくりしたぞ！」

父は目に涙を浮かべながら言った。僕はそんな父に微笑を浮かべながら言った。

「父さん、死って終着駅だけど、始発駅でもあるんだね。僕たちだけが王様に駅鈴を持たせてあげられるんだね。僕、ミイラ技師になりたい。修行がしたいんだ。」

此処に偉大なミイラ技師がひとり生まれた。

ユキガフルホド

『東口』

メールを見た瞬間に、弾かれたように顔を上げた。今か今かと待っていたけれど、まさか本当に電話一本で来てくれるとは思わなかった。すぐに行かなきゃ。会いたい、会えるんだ。あの道のりを、この寒い中・・・私のために、来てくれたんだ。

あまりの嬉しさに、体が小刻みに震えているのに気がついた。

別に、それと言ってやなことがあったわけじゃない。だけど、ちよつとしたもやもやが積もりに積もつて、気がついたら動き出す気力がなくなつてた。寝てもやらなきゃいけないことが重くのしかかつてきて休めないし、そのせいで本当に大事なときに寝てしまつていて、自己嫌悪に陥る。気分が乗らなくてやらないといけないことは終わらなくて、さらに休めなくなる。悪循環。休日も外せない用事で潰れてく。休めない。誰か、私を助けて・・・！！ 必要なのは、時間だった。だけど時間が取れない。じゃあ、私は一体どうすれば癒される？

たまらなくなつて電話した。「ただ、声が聞きたかつただけ」そう言う私に、彼は苦笑した。ああ、また呆れられた。だけどどうしてだろう。絶対に彼は怒つたりしないって、わかつた。くだらない話を、繰り返した。

「行くよ」

その言葉が突然降つてきた。何を言つてるのか最初理解できなかった。「側に行く」。また言つた。何を言つてるんだろう？ 一体どれだけの距離があるつていうんだろう？ 来れるわけない。

なのに私が紡いだ言葉は、違つた。「うん、会いたい、な」

来て欲しかつた。

誰より、彼に、抱きしめられたかつた。

何度も通つたはずの駅までの道のりが、今までで一番長く感じる。足がもつれてうまく走れない。吐き出した息はあつという間に凍り付いて宙を舞つて消えた。空気に触れる手は寒さで赤くなつていく。ほら、こんなに寒いのに、どうしてあの道のりを側まで来てくれるの？ 申し訳ない気持ちと嬉しさと体が張り裂けそうだった。

駅に着いた。

東口に、彼はいた。

手を振ると、彼はいつものほにかんだような笑顔を浮かべて近づいてきた。

「会いたかつた」

どっちが先にそう言つたのかは、覚えてないけど。

彼の私よりずっと大きな体にぎゅつと手を回しながら顔を上げると、はらはらと降ってきた冷たいものが顔に当たつた。

「ユキ、だね」

雪が降るほど寒い日に、こつやつて側にいてくれてありがとう。でも、もう寒くなつてないね。

いつものバイトの帰り、俺は○○○の丘での立ち読みそこそこ家へと帰る途中だった。自由が丘の駅ですら深夜になると今にもどこからか液状のものを出さんとする人も表れる。って言うてるそばから戻してるよあのおっさん。あれか、俺にシリアスなモノローグは無理っ！神の思し召しか。ふううっ、気を取り直して。

さえない顔をしながら歩いていると、声をかけてくるおっさんがいた。どうせ宗教か占いの話だろ、まかり間違ってもスカウトの話ではないのは確定だ。

「○○○○○」（台詞はご想像にお任せします）

よく見てみると、後ろには店っぽく作ろうとしているスペースはあるし、明らかに詐欺まがいでも声をかけるには怪しすぎるおっさんだった。どこか奥に連れ込むワケでもないみたいで気が向いたからやってみることにした。

ジャラジャラジャラ

知識では知っていたが未だにあるとは思ってなかった光景である。あつさて、あつさて、さてさ。とか言い始めん感じだ。とつさに後ろ向く俺。白い看板を持ってるやつを探す。どうやらあの企画の復刻版ではないみたいだ。

「○○○○○」（台詞はご想像にお任せします）

ややつ、余計なことを考えているうちに結果が出たみたいだ。ふむふむ、うまく行かないことに手を抜きすぎてからよいことが起こらない？心当たりがあり過ぎで困る。一コマめの授業をマジめに受けようかな。んでどーすりゃいいの俺？

「○○○○○」（台詞はご想像にお任せ。．．）

おっさんは赤い点が一個ついた棒を一本こっちによこしてきた。ぬあ、大事な夏目さんを連れてく気か！

「○○○○○」（台詞はご．．．）

いるものといらないものの見切りを付けろということか。右から切つてくに限る。そろそろ終電じゃねえか。じゃあなおっさん。

「オ客サン、ワタシの点棒占、ドウダツタルカ？」

いろいろツッコミたいがあえて一っただけ言おう。紛らわしいとこやんなっ！

みたいな事をこれを見て思った。

易

赤い大地

じやぶじやぶと、私は手にこびりついた赤黒い液体を洗う。粗末な洗面器で、絵の具を流し込んだかのように水が染まっている。初めの頃はやるせない気持ちとともに眺めていたその光景を見ても、もはや何の感情も浮かんでこない。何か、麻痺してしまっている。

ふと視線を巡らせる。部屋には、血で染まったタオルや、使いすぎて錆び始めた聴診器が転がっている。なぜか頭痛がした。気を落ち着かせようと深呼吸をしても、口に入ってくるの生臭い鉄のような味の空気だけだ。

コンコン、と、無機質なノックの音がした。また患者が来たらしい。いや、こない方がおかしいか。小さく息を吐くと、よれよれの白衣を翻して病室に向かった。

この小さな国では、致死性の疫病が蔓延している。誰か現地向かってくれな
いか。

今から二ヶ月ほど前、院長に言われたこの言葉に、私はすぐに名乗り出ていた。正直、そのときは軽い気持ちで請け負っていた。病院勤めを始めて五年。繰り返すだけの生活に少々の飽きが来ていた私は、気分転換のつもりで参加を決意した。無論、現地で手を抜くような気持ちは毛頭なかった。単に、私は新しい何かを欲していたのだ。

だが、現地についてみて、私はここに来たことを後悔せざるを得なかった

その集落は、とても生きた人間の集まりには見えなかった。立って歩ける人間が全体の三割もない。死体が出る速度が速すぎ、埋葬しきれない者たちの山ができている。空気が淀み、そこかしこにウジが湧いている。思わず、生き地獄、という言葉が脳裏に浮かんだ。

そして何より、こちらの医療環境が劣悪だった。実際、蔓延している疫病はワクチンさえうてば治るような簡単な病気だ。だが、そのワクチンが徹底的に不足していた。近くに駅がないどころか、線路や道路すらないようなここに大量のワクチンを運び込むには、当然空路に頼るしかない。しかし、それには莫大な輸送費がかかることになる。企業は利益が出ることにしか動かない。募金にも限界がある。個人で出すには、とてもではないがまかないきれない。

ゆえに、医療班は診療所レベルの機器を用いて、無駄と分かっているその場しのぎの治療をいたずらに続けるしかなかった。

新しく運び込まれてきたのは、還暦も近いくらいの老人だった。なんでも、朝から吐血を繰り返し、呼吸もままならないらしい。当然、疫病に感染している。

私は、言葉の上では優しくしていながらも、その老人に死体を見るのと同じ視線を向けている自分をはっきりと自覚していた。

無常に音を立てて開まったドアの向こうから
そつと小さく手を振る。もう二度と帰ることな
ど無いと分かりながらも、何も知らないまま
「行つてらっしゃい」と声をかけてくれたあの人
をまつすぐに見つめながら。

あの日の Love letter

友達という言葉ではくることができない関
係だった。もしかしたら、周りからは付き合つて
ると思われてたのかな。今となつてはどうでもい
いことだけ。

あの頃はそういう関係だった。あの日の出会
いからずっと 3 年間一緒に居た。恋人以上の
信頼関係がきつと彼とはあつたのだと思う。

確かめたいと思わなかつたことは無い。けれ
ども、私にはその関係がとても心地よかった。
誰がそれを壊そうとするのだろう。後悔はし
ていない。

「両親が離婚したの」と、彼に言うことはどう
してもできなかった。だから、彼には「言うこ
とにした。『遠くの大学に行くの』」と。

その瞬間、彼はひどくショックを受けたよう
だった。けれど、「これからがんばれよ」といつて
くれた。私はどうしていいかわからずに静かに
うつむいてうなずいた。彼は本当にどこまでも
優しかった。

それから、彼はいつもどおり接してくれて
いた。きつとあの時私はあせつたのだと思う。な
んで彼はいつもどおりなの。私が遠くに行つて
しまうことを悲しんでくれないなんて。私は
どうしても彼の気持ちを確かめたかった。

いつしか、出発の日が近づくと、机の上には、
手紙が一通置かれていた。しばらくは確実に戻
つてこれない。だからこそ残るものを、と書いた
手紙だった。私の彼への想いをつづた手紙。地
元の工場に就職が決まっていた彼に、絶対に渡
さないといけない。そう思つて夢中になつて書い
た。何度も何度も書き直してやつと完成した手
紙だった。けれども、彼はいつもどおり。そのま
ま書いたきり渡す機会を失つてしまつていた。

出発の前日のことだった。突然、彼が自転車
で駅まで送ると言いはじめた。電車が出るのは
早朝であること、駅までは親と一緒に行くつも
りであることを伝えたが、彼は断固として譲ら
なかつた。そのときはなぜか無性にうれしかった
のはよく覚えている。

結局は私が折れる形になった。いつものこと
だった。彼は一度言うつと絶対に譲らなかつた。
私はそれにいつも付き合つてあげていたような
気がする。

出発の日の早朝のこと、前日に父親を説得し
ておいたおかげで、私は彼の自転車の後ろに乗
つていくことができた。彼は「日の出が早くなつ
てきた」とか、たわいも無いような話しかしてく
れなかつたけど、そのとき、私にはそれがうれし
かつた。

彼は力を入れて坂を上つていく。この坂を上
ると駅に着く。渡さなきゃ。渡さなきゃ。ポケ
ットに入つた小さな封筒を。

彼が入場券を買っている様子を眺めて、それ
から構内に入つた。私が持っているのは一回り
大きい片道切符。私は遠くへ行つてしまう。本
当に彼とはもうここでお別れ。

ついにやつてきた電車を恨めしく眺めながら、
ポケットに手を入れた。

けれど、電車に乗り込んで最後に言つた言葉
は「さよなら」だった。なんて情けないんだろう、
私つて。ポケットの中に眠る小さな封筒を握り
しめて、ただ一言さよならと言つたのだった。

けれども、彼はすぐにこの言葉を遮つて、「行
つてらっしゃい」と笑顔で言い、手を振つてくれた
その瞬間、無常に音を立ててドアは閉まつた。

結局あれからあの町にも行けず仕舞いで、彼
とも連絡が途絶えてしまった。彼は今どこで何
をしているのだろうとふと思うことがある。

今、残るのは淡い思い出だけ。それが真実だつ
たと証明するただ一通の手紙を残して。

葛藤

僕は駅のホームで最終電車を待っていた。反対方面は人がホームからこぼれ落ちそうなくらい混雑しているのに比べ、僕の帰宅する方面はがらがらだった。

やがて電車がホームに到着した。勿論電車の中もがら空きで、所々の座席には人がうとうとしながら座っていた。週末の最終電車は酒臭いから嫌いだ。まあ満員電車で電車の揺れに酔った酔っ払いが食べ物交じりの液体を嘔吐する現象が無いだけマシか。

次の駅で一人の男が僕の斜め前に座った。その男は帽子を深く被り、マフラーで顔を隠すようにして何やらいぶかしげである。僕は犬として眠たくも無かったので、ぼうつとその男を見ていた。

するとその男はふいに立ち上がり席を移動した。見ていたことに気づかれたのかと思い、思わず目をそらした。しかし、男は車両を移動するわけでもなく少し離れたところにいびきをかきながら寝ているサラリーマンらしき人の隣にぴたりと座った。電車にはほとんど人が乗っていない状態なので明らかにその行動はおかしい。僕は気づかれないように寝たフリをしながらその男を観察した。その男は隣の男が起きていないのを確信して隣の男の後ろのスーツポケットの辺りに手を伸ばした。間違いない。これは窃盗だ。どうやら手こずっている様子も無かったので恐らく常習犯だろう。案の定その男は財布のようなものを抜き取って自分の革ジャンのポケットに素早く押し込むとまたふいに立ち上がって、今度は別の車両に行ったようだった。僕は咄嗟に自分の後ろのポケットを触った。ちゃんと財布があることを確認すると安堵のため息をついた。

その時僕は、犯罪を当然のように犯す奴が居るということに落胆すると同時に、自分のあまりの不甲斐なさに自己嫌悪に陥った。たった今自分の目の前で犯罪が行われていたというのに、僕は寝たフリをして、その男に呵責するどころか被害者に声を掛けることすら出来なかった。その男に下手に呵責して血を見るのが怖かったし、被害者から何故止めてくれなかったのかと責め立てられるのが厄介だったからだ。それどころか自分の財布があったことにほっとしてしまっただけ。自分にとって益の無いことは喻え良心が傷ついてもやらない僕は、目の前の益に囚われて周りが見えなくなっている、僕がたった今幻滅したその男と同じではないか。人間は、そんなに益に左右されるしょうもない生き物なのか。自分がよければそれでいい、そんな意地汚い生き物なのか。そう思うと目頭があつくになった。

最寄り駅で電車を降りてそそくさと家路に向かった。

ふと上を見ると、まるで僕の遣らしかしたことを全て照らし出すかのように大きな満月が空に浮かんでいた。

メイドカメイド

亀戸駅とは、聖地から総武線各駅停車下り方面で4つ先にある、東京の下町を支える決して大きくない駅である。その駅がこうも変わっていいようとは。

俺は総武線で大学に通っているの、亀戸は定期で降りられるが、特に用事はなくここ数年は降りていない。だから知らなかった。

その日は午後の講義が休講で、昼過ぎに帰りの電車に乗った。

する事もなく快速の京浜東北線に乗り、たまたま座れたのをいいことにまどろみ気づくと、しまった神田を通過している！

普段は総武線の快速を使うので東京までに降りたかったのだが……乗り過した！秋葉原に行けというお告げか！しかし予約したアニメのボックスが今週末発売で、いま聖地に赴く用事はなかったの、総武線各駅停車に乗り換えた。

念のため申し上げておくが、俺はヲタクではない。とはいえ、まだ時間がかなり余っている。どこかで降りてみようと思った。

浅草橋、両国……観光じゃないし。錦糸町は飽きたし。平井過ぎたらもう地元と変わらないし……じゃ亀戸か？

気付くと俺は本当に亀戸で電車を降りていた。そのまま改札に向かう。何年ぶりだろうか。

階段を降りると、俺はその異常な空間を目の当たりにした。

壁と天井が美しく真っ白に塗られている。床のタイルは一点の塵もなく掃き清められ、さながら屋敷に招かれた気分になった。

そういえば駅内の立食ソバ屋がない。かわりに喫茶店があった。

改札へ向かうとさらに愕然とした。自動改札がない！すべて人が立っていた。全て十代から二十代の女の子に見える。いや一番注目すべきはその服装か。ところどころにレースの入った黒に白のエプロンドレス、髪にもレースのカチューシャ状の髪飾りがついている。

メイドさんだった。だからそこにあったのは「メイド改札」ということになる。

カメイドだからか。安直な発想だ。

まだ昼を食っていなかった。俺は改札を出ずに、何か予感のする駅内の喫茶店に入った。

やっぱり。店員はメイドだった。内装についてはそれは綺麗だったが。

「いらつしやいませ、ご主人様」

俺は主人じゃないんだが。

「ご注文はお決まりですか？」

注文は食券じゃないのか。喫茶店なのにソバもメニューにあったのでそれにした。五分ほどで来た。意外とうまい。

隣のメイドが嘸つまずいてコーヒーをこぼした。見ると三回に一回の割合でこぼしている。転ぶ度にエプロンを留める後ろの大きなリボンがふわりと浮かぶ。ドジっ娘設定か。そういうマニュアルか。いい迷惑である。

俺は土次无専門なので微妙に理解できなかったが、秋葉原の勢力(?)はついにここまで掌握していたのか。このままでは亀戸天神の巫女さんもメイド化する日も近いかもしれない！などと危惧だか期待だかわからない思いに駆られながら、とりあえず改札に行った。

「いらつしやいませ、ご主人様」

だからご主人様じゃない。しかもこれから外に出るのにいらつしやいませって……

「乗車券をお預かり致します」

定期を渡さなければならぬらしい。タッチ&ゴーが使えないじゃないか。

「はい、結構です。またお待ちしております、ご主人様」

そりや、また来ないと帰れないからな。

※この文章はフィクションです。実際の地名、人物等とは一切関係がありません。

少年の住んでいた村には小さな小さな駅があった。

駅と呼べるのか怪しいぐらい小さかった。

線路は途中で途切れていた。

踏み切りは案山子のようなだった。

少年の覚えている限りでは、一度も汽車が訪れた事は無い。

少年は自分の住んでいる村が嫌いだった。

田と畑と森とあぜ道と、後は何も無い村が嫌いだった。

少年は自分の住んでいる村が嫌いだった。

自分が家業を継ぐことを考えると気がめいいた。

少年は自分の住んでいる村が嫌いだった。

少年はいつか「もう少し大人」になったらこの村を出ようと思っていた。

少年は子供だった。

少年は幼かった。

少年はなかなか「もう少し大人」にならなかった。

そんな時、少年は夢を見た。

いつも人氣の無いあの駅に、汽車が止まっていた。

少年は是非も無くその汽車に飛び乗った。

汽車は線路の無い草原を走り始めた。

汽車は実にさまざまな場所を走った。

海辺の町に、山奥の村に、高原の頂に、

都会に、砂漠に、草原に、熱帯雨林に、ツンドラに。

少年は汽車で旅をしながら成長した。

旅で出会った女性と恋をし、結婚した。

二人で汽車に乗って異国の地を奔走した。

子供が出来ても、二人は旅をやめなかった。

汽車こそが彼らの故郷であった。

同じ地を二度と踏むことなく、子供は成長した。

やがて子供も成長し、一人で旅をするようになった。

彼らは広くなった汽車で二人で旅をした。

汽車は走り続けた。

ある日、年老いた妻に先立たれた。

彼は妻を異国の地に、異国の風習に沿って埋葬した。

それでも彼は旅をやめなかった。

正直、彼は疲れてきた。

子供は一人で旅に出て、妻はひっそりと亡くなって。

いつもいる汽車の座席が広く感じた。

いつものように汽車は駅に到着した。

だが一向に出發する気配が無い。

どうしたんだ、と声をかけてみた。

終点ですよ 降りてください

どういうことだ

終点ですよ

もうこれ以上汽車は走りませんよ

仕方無しに降りてみた。

だがそこには、

かつて自分が乗り込んだ小さな小さな駅舎があった。

自分が心底嫌っていた村が、そこには、あった。

少年は怒鳴った。

早く汽車を出してくれ、俺はこんな所には留まりたくない
さあ汽車を出せ、俺をこの村からさっさと出してくれ

望郷など考えもしなかった、懐古の情など持ってなかった

それなのに、なんでこんなにもこの地が懐かしいんだ

だめだ、俺はこれ以上ここに居られない

お願いだ、さっさと汽車を出してくれ

これ以上ここに留まるとおかしくなりそうなんだ

声が、聞こえた

終点ですよ 起きてください

少年は夢から覚めた。

泣いてる理由など忘れてしまった。

結局、少年は「もう少し大人」にならなかった。